

スタア小説

汚れた英雄¹

作者 鶴田浩二

ジョーと呼ばれる男

京浜川崎の一劃。大小無数の煙突が立ち並びそこから吐き出される煙は建物の肌を見るからに薄穢く汚し、暗くよどんだ空気の如何にも暗黒の街の表情を思わせるこゝ帯は、およそ世の汚濁と背徳の温床のような場所である。そうした路地の奥の片隅に、焼跡のビルを改造した形ばかり大きいサクラアパートがある。その三階の一室でジョーは今、深い眠りから呼び戻されたばかりの生気のない顔にとろんと濁ったその眼を、カーテンの端から漏れる初冬の陽ざしに、眩しそうに眼を細めると、倦怠を吐き出すように低くうめいて、大きく欠伸した。

やがて手探りで枕元のシガレットケースからキャメルを一本引き抜くと口に啣え、その返す手で寝乱れた頭髪をボリボリ掻きむしる。そうした動作の度に、ジョーの逞しい身体を載せたベッドはギイギイ不快な金属音を発して軋む。疲労で憔悴した顔は、その一本の煙草によって僅かに生気を甦えらせるのだ。

ふとジョーの視覚にはっきりと室の片隅の鏡台に向っているしどけない女の後姿が写る。と次の瞬間、ジョーの無表情な顔が激しく歪むと、ついと逃れるように眼をそらす。「もうお眼覚めかい」然し、ジョーはそれには答えず、さも五月蠅そうに起き上ると、サッとカーテンを引く。うすら寒い空気にジョーの身体の筋肉がピリッと引き締まるようだ。

ジョーは思い立つと素早く身支度をした「おや、もうお出掛け、一寸待って」慌てたようにジョーにすがりつくのを「うるせえ」女を思い切り振り放して廊下に出る。「ジョー、ジョー、今日はやばいよ……先刻(さっき)、サツの奴等が玄関でウロウロしていたのをあたいは見たんだよジョー！」

最後は涙声になって叫ぶ女の甲高い声をしりめに「チェッ」と舌打ちすると、ズボンのポケットから鍵を出し、ガチャリとかける。その音に混って何やらわけのわからぬ叫声を耳に残して足早やに歩き出す。左手で上衣の上から内ポケットのコルトを確め、右手で鍵をもてあそび乍ら、平然と何時ものようにゆっくりコンクリートの階段を下りる。ジョーは其処の入口でチラッと姿が消えた影にギクリと立止った。と反射的に右手が上衣の内ポケットに滑り込みジョーの眼は激しい輝きを見せて、鋭く動くが、彼特有の日頃の無表情さにかえると、何事もなかったように大股に歩き出した。

——どうやらアケミの云ったことも本当らしいな……

ジョーはこゝ半年ばかり続いている麻薬の密売で、近ごろ自分の身边が危くなっている

¹ 作者の言葉・・・私はずっと以前に観た「汚れた顔の天使」「デット・エンド」のようなものをやってみたくて、こんなストーリーを考えた。この物語の二人の主人公の主観を通して別個な立場から、人間を描いてみた。これはおよそ小説とは、縁遠いものかも知れぬが、しかし私はあくまで映画のストーリーとして組み立てたのだから……。

ことを不図（ふと）思い出すのだった。

——まあいゝや、いざとなりや……

傲慢な自信が、至極あっさりと忘れさせて、玄関から肌寒い表へ出た。

ナイフと遊ぶ少年

「あっ！ ジョーだ」「そうだ。ジョーが行くよ」

ビルの横に広がる空地に群がっていた少年達の視線が一斉に、黒ダブルの上衣に両手をつっこんだジョーに向けられて、その眼は皆一様に輝き、頬を紅潮させて自分達の将来の姿を其処に見出したように感激する。それだけにこれ等の少年にとってジョーの映像は彼等の畏敬と憧憬と羨望の的ともなって……だが、ジョーにはそんなチンピラの眼など問題ではない。その時キラリと陽光に煌くナイフに一寸眼をとめる。

——小僧、またやってるな。

彼は心でそう嘯（うそぶく）くと、およそ惨忍な男にしては珍しい微笑をチラッと覗かせる。そのジョーの視線を背に強く意識しながら、三郎は何時かジョーに賞められた時のようにポウッと紅潮させた顔を誤魔化すように思い切り手中のナイフを的に投げつけた。投げられたナイフは糸を引いて的にグサリとさゝる。三郎はその手答えに満足して微かに頷くそれから不自由な足を引きずるようにして的にナイフを抜く。片輪者の手慰さみに覚えたこうした動作が日に何十回となく繰り返されるのだ。何時かこうした三郎を仲間は忘れてしまう。もともと彼はこの愚連隊の仲間に入る資格はないのだが……。

十五にしては小柄で跛な身体が如何にも腺病質らしく見える。だから最初三郎が戦災で家と両親を失い、姉の圭子と一緒にこの地に流れて来た頃は仲間は彼を異端者扱いにし、片論者の彼を白眼視したのも無理はない。所がその三郎のナイフ投げはこれ等のチンピラの度肝を抜くに充分であった。それに何時も素気なく通って行くジョーまでが、ある日三郎に近づくと、「てめえ、サーカスのナイフ投げか？」三郎はジョーのその威圧的な迫力に押されて唇をワナワナさせ、やっとな首を横に振って否定の表現をした。「フウン……まあ、しっかりやんな」

それ以来ジョーは三郎のナイフ投げに意を止めるようであった。この仲間にしてみればジョーに言葉をかけられたという事は脅威に値することだったので、それからのチンピラ共の三郎に対する態度がガラリと変って彼のことを親しく「サブ」と呼ぶようになった。

その三郎はサクラアパートの裏の陽当りの悪い裏長屋に姉の圭子とたった二人きりで住んでいた。十九の圭子は、不遇の身を逆境に喘ぎながらも、身を捨てることなく温和しくもしっかりした美しい娘であった。食生活の苦しさに社交喫茶に勤めてはいるものゝ、何かと不具の弟の面倒をやさしくみてやっていた。だから三郎はこの姉だけが何ものにもまして心の誇りなのであった。不具の身をすねてひねくれ者ではあったが姉にだけは従順な三郎であった。それともう一つ三郎にはチビちゃんという八つになる女の子の友達がいた。サクラアパートの管理人の娘で、大抵三郎がナイフ投げの練習をする間、傍についてくれた。そして三郎の投げたナイフを足の悪い彼に代ってとって来てくれるのだった。だから彼女を可愛がることおびたゞしい。彼女が居ないと練習に身が入らないのだった。

雨の捕縛

——あのナイフの威力は俺のパチンコ位の力はある。

ジョーは歩き乍ら、先刻(さっき)広場で見た三郎のナイフを思い出した。瞬間、ジョーの背筋に冷たい悪寒が走る。だがすぐに彼の不屈な魂がそうした不安を払い落すように、「馬鹿な！ あんな小僧に何が出来る」と思わずつぶやく。

——俺の心に一寸したスリルを味わわせてくれた小僧に滅法切れるナイフでも買ってやるか……

そこまで考えると、成る程これは思いつきだと彼は独り悦に入るのだった。雨が降って来た。思わずすくめた首筋に冷たい雨がふりかゝる。とその彼を男の手が遮二無二小路に引張り込む。「兄貴大変だ、健が今朝あげられたんだ」ひどく慌てゝ浮ずった弟分の哲の言葉に「それで……？」「今朝バラしやがった。親分から早いとこ逃(ず)らかれって命令だ。金は兄貴の分も一緒に預ってるんだ」哲は思いなしか震えながら右手の革のボストンバッグを指した。「幾らあるんだ」

ジョーの無表情な顔に生気が走って異様な目附になる。そうした彼の表情の変化に、哲は不吉な予感をかくして、「三十万だ、兄貴に廿万、俺が拾万……」それをみなまで云わずジョーは、「来い！」と吠えるように叫ぶと一変した敏捷さでしとゞ降る霧雨の道を足早に歩き出した。ジョーと哲は地面を蹴るように急ぐ。やがて倉庫が見える広場を通してサクラアパートの建物が見えるとジョーの足が其処でピタリと止る。一瞬、哲の顔に不可解な動きを、ジョーは真正面に打ち据えながら、「このまゝ、真直ぐ行つたんじゃ危ねえ、一寸その倉庫の陰へでも行って様子を見ようじゃねえか」

哲の不安な眼もとを笑うようにチラッと冷たく微笑んで倉庫の陰に廻る。それからゆっくり四圍(あたり)を見廻して、やがて人影のないことに安堵して頷くと、不意に、「それを置いて、けえんな」「えッ」「けえりゃいゝんだよ」寝耳に水のこの言葉に哲は怒りに蒼白(まっさお)な面を上げて、手足を恐怖に慄わせた。

「畜生ッ」と呻くと、いざという場合のこの男の惨忍さを知っているだけに、抑制しきれない兇悪な怒りが、激しくジョーに襲いかゝる。ジョーの顔に殺気が走っていきなり哲の首をぐいぐいしめつけた。手向う隙もなく哲は真赤に充血した顔を次第に喘ぎ遂にぐったりと動かなくなつた。やがてジョーは呼吸も荒々しく雨に濡れた頭髪をかき上げると立ち上りざま目の前のボストンバッグを掴んだ。

何時の間にか集つたのか例のチンピラ連が遠巻きに垣を作り、恐怖と興奮に茫然と立ちつくしている。ジョーは彼等に一瞥を与えただけで去ろうとしたが、不図思い出し上衣のポケットからナイフを出すと三郎に「こりゃ先刻(さっき)のお礼だ」意味も解らず押しつけるように渡されたナイフを握らされて三郎は茫然としている。

その間にジョーは凄い勢で広場をつゞきりアパートの玄関に滑り込むと一気に階段を駆け昇り、三階の部屋に飛び込んだ。その勢に押されてアケミはギョッとして振り向く。ジョーは寝台の下から、新しいコルトと弾丸の入った箱を引きずり出すと、ありったけの弾丸をダブルのポケットへ押し込んだ。アケミは不安な表情の中でやっと男の行動を予測して、「ジョー、あたいも連れてって！」と身を投げるように男の足許にしがみつく。ジョー

はその女の身体を見向きもせず足で蹴とばし、「邪魔だ、おとなしくこゝで待ってろ」と云いすてゝドアの所まで進んだが、女は必死で再びジョーの身体に絡みつくように跳びかゝって行った。「ジョー、待って!」「うるせえ!」

叱りつけるように云って相手の身体を投げ飛ばすと同時に、彼の右手の拳銃もはずみを喰って一緒に床の上に投げ出されてしまった。女の手は素早くそのコルトを拾う。「ジョー、お願い、自首して、それが嫌ならあたいも一緒に連れてって……」「おらあ、行くぜ」

冷たく云いきってサッと歩き出す。そうしたジョーの足がコンクリートの階段を下りようとした瞬間、女の泣き顔が醜く歪む。「畜生! 殺してやる」と云う絶叫と同時に、コルトが轟然と火を吐く。「あっ!!」叫んだまゝジョーの身体はもんどり打ってコンクリートの階段を落ちて行く……。然しそのジョーの身を気遣いながら、階段を駆け下りようとしたアケミの心臓を、もう一つのコルトが転んだまゝの姿勢で見事に射ち貫く。

「畜生、手間どらせやがって」ジョーは立ち上るが、射たれた足の疼痛で身体がグラリと傾く。「ウ、、、」激しい苦痛にジョーはしばし息をはずませながら、やっと階段の手摺りで身体を支える。と、その拳銃の音を聞きつけた警官隊の階段を昇って来る足音が近づくと、ジョーの顔はみるみる緊張にひき歪む。だが彼の視野に映ったのは今にも泣き出しそうな管理人の子供の怯えきった姿だった。ジョーは何の躊躇もなく脱兎の如くその少女に襲いかゝって行った。

外では近所の悪童連の中に混って三郎はジョーから貰った素晴らしいナイフをしっかりとポケットの中に握りしめていた。あのジョーが警官隊を蹴散らし乍ら、颯爽と現れる西部劇の主人公のような姿が、決定的な事実のように描かれていたが、然しそれから数分後、彼等の眼前に展開したものは少年達の期待を裏切って……
——なんと云うことだろう。

ジョーの抱えている少女はあのチビちゃんではないか。泣き叫ぶチビちゃんの頭上にコルトは向けられて威嚇しているのだ。三郎は全身の血の逆流するのをどうしようもなかった。オロオロする母親を庇うように姉の圭子の姿を見た時、本能的に先刻のナイフを握りしめ彼の背後にそっと近づいて行った。最早、三郎にはジョーに対する一切の感情は逆転して……

——神様、私はもうナイフ投げを止めます。どうかこれ一度だけ神様のお力を私にお貸し下さい。

これは三郎の眩きだったが、おそらくそれを見ていたみんなの心であったろう。雨におゝわれたこの広場に傘さす人とてない、びっしょり濡れながら三郎は必死の表情で、彼の目標物に向ってナイフをハッシと投げた。生けるものゝ如くナイフは目に止まらぬ早さで、少女の頭を狙っていたジョーの右手へグサリとつきさゝった。瞬間、異様な嬌声と共にコルトと、札の入ったボストンバッグは地面に投げ出され無意識にジョーの手から少女は離れた。と同時にワッ! と喚声が上ってジョーの方へ群集は殺到して行った。

かくして総ては終わった。嘗(か)って英雄と謳われたジョーは今、その面影もなく寂しく警官隊にひかれて行く。皆んな雨に打たれて泣いている。三郎も泣いている。然しその涙は、今日まで彼等の誤まてる過去への訣別の涙ではなくて何であったろう。